「なぜ君は総理大臣になれないのか」

座談会

昨年は政治を題材にした映画が話題になりました。藤沢市出身の大島新（あらた）監督のドキュメンタリー映画「なぜ君は総理大臣になれないのか」もそのひとつです。現職の立憲民主党の衆議院議員小川淳也氏の立志から希望、挫折など苦悩に満ちた17年間を描いたもの。

日本各地の劇場で公開され注目を集めています。今回大島さんを交えて、ジャーナリストや画家の立場から、映画の感想や、制作に至るまでの背景などを語り合っていただきました。

【出席者】

・大島　新　（フジテレビ入社・退社、フリー、2007年ドキュメンタリー映画「シアトリカル　唐十郎と劇団唐組の記録」を監督、同作は第17回日本映画批評家大賞ドキュメンタリー作品賞受賞。映像制作会社ネツゲン創業者）

・柴崎　信三　（ジャーナリスト、日本記者クラブ会員、大学講師、元日本経済新聞社論説委員）※リモートでの参加

【司会】

・富安千鶴子　（日本美術家連盟会員、日本画家、湘南アカデミア講師）

ドキュメンタリー映画「なぜ君は総理大臣になれないのか」

富安　大島監督が制作された映画が反響を呼んでいます。ひとりの政治家を17年間にも及ぶ長期間に渡って密着取材をされたのはなぜですか？

大島　小川さんは妻の高校の同級生だったんです。当時テレビで人物ドキュメンタリーの仕事をしていて、常々政治家を撮りたいと思っていました。永田町の政治家は難しいと感じていたので、「初出馬の方なら…」と思ったのがはじまりです。小川さんの初の選挙戦を取材して、非常に興味深い人物であること、また「並みの理想主義者でない青臭さ」に関心を持ちました。

映画にしたいと思ったのは2016年です。小川さんが政治の世界で壁にぶつかり、苦悩する姿を見て、「なんでこんなに真っ当で優秀な人がうまくいかないのか」という疑問を抱きました。怒りに近かったのかもしれません。それを探る取材というつもりでスタートしました。

富安　柴崎先生は映画をご覧になっていかがでしたか？

柴崎　とてもおもしろかったです。17年間フォローされていたとのこと。大島さんの原点には政治家を描くこと以前に、「人物への関心」があったからではと思います。だからこそ現在の政治家、しかも政治技術をやり取りする政治家と違うある種の理想を持ち続け、悪戦苦闘されている人を描かれたのでしょう。

長年のジャーナリスト生活でインタビューを山ほど経験してきたので、人物を描くことの難しさは嫌というほど感じています。富安先生も画を描かれるので同様に感じていらっしゃると思います。

この映画はとても丁寧に描かれていると感じました。結果として現代の日本の政治の貧しさを映し出している作品になっていると思います。

大島　過分なお言葉をありがとうございます。

「三島由紀夫vs大島渚」時代の政治と今の政治

富安　大島監督は生まれた年が1969年と伺っております。この年は三島由紀夫が東大構内に乗り込み、全共闘の学生1、000人対ひとりで対話した年でもあります。翌年に自決事件が起こりました。三島由紀夫の義父である杉山寧に日本画を師事していましたので、事件のことは鮮烈に覚えています。世の中を揺るがす大変な事件を背景に誕生されたのですね。

大島監督のお父様の大島渚監督は、三島由紀夫と何回か対談をされています。柴崎先生は三島由紀夫を取材されているので、この辺りのお話をお聞かせください。

柴崎　大島監督の経歴を伺って感慨を覚えたのですが、生年の1969年はちょうど私が新聞社に入社した年です。それも駆け出しだった翌年、三島事件が起き、現場に駆け付けました。中には入れませんでしたが、目の当たりにしたシーンはいまだに脳裏に焼き付いています。

大島新さん

大島渚の対話を思いながら、政治の移ろいを強く感じた次第です。

大島監督はお父様の時代の政治を歴史としてご覧になってきて、今と比較されてどう思われますか？

大島　昨年公開された記録映画「三島由紀夫vs東大全共闘50年目の真実」は興味深く拝見しました。たったひとりで東大に乗り込んで、1、000人対ひとで対話した年でもあります。翌年に自決事件が起こりました。三島由紀夫の義父である杉山寧に日本画を師事していましたので、事件のことは鮮烈に覚えています。世の中を揺るがす大変な事件を背景に誕生されたのですね。

大島監督のお父様の大島渚監督は、三島由紀夫と何回か対談をされています。柴崎先生は三島由紀夫を取材されているので、この辺りのお話をお聞かせください。

柴崎　大島監督の経歴を伺って感慨を覚えたのですが、生年の1969年はちょうど私が新聞社に入社した年です。それも駆け出しだった翌年、三島事件が起き、現場に駆け付けました。中には入れませんでしたが、目の当たりにしたシーンはいまだに脳裏に焼き付いています。

大島渚監督と三島由紀夫の対談は、「三島由紀夫映画論集成」の中に「ファシストか革命家か」というタイトルで掲載されていますね。三島は右側から今の政治を否定する。それに対して渚監督は強いていえば左の方から政治を糾弾する。おふたりのぶつかり合いは、実にスリリングです。確か1968年でした。この頃は議会における民主主義のしくみが右と左の両側から問われて沸騰しているような時代でした。今の政治と重ねて考えることはできませんが、一党政治を持続しているような状況下で、若い人は関心がないか、あっても極めて現状肯定的に思えます。保守を否定するつもりはありませんが、現状を肯定したまま批判はしないのかな…それでいいのかな…と。

半世紀前の三島由紀夫vs大島渚の対話を思いながら、政治の移ろいを強く感じた次第です。

大島監督はお父様の時代の政治を歴史としてご覧になってきて、今と比較されてどう思われますか？

大島　昨年公開された記録映画「三島由紀夫vs東大全共闘50年目の真実」は興味深く拝見しました。たったひとりで東大に乗り込んで、1、000人対ひとり